

■他言語・他文化圏の子どもたちと読書について

## 「移動する子どもたち」が絵本をよむとき

早稲田大学大学院日本語教育研究科 川上 郁雄

### ◆大震災のあと

3月11日、東北関東地方に巨大地震が発生しました。私は、この原稿を、ライフラインがまだ復旧していない仙台市の自宅で書いています。今も、テレビでは福島の子原子力発電所への対応や各地の避難所で過ごす被災者のニュースが盛んに報道されています。日本がかつて経験したことのない最大級の災害の真つただ中です。

私は家族とともに自宅で震度7を直接体感し、ライフラインが止まるという不慣れた生活の中にいますが、命が助かった分だけましな方です。もっと厳しい環境で今を過ごしておられる被災者の方々を考えると心が痛みます。私自身が被災してみて、なおいつそうその痛みが実感されます。

まだまだ復興の道は遠いのですが、心配なのは心のサポートです。特に、被災弱者と呼ばれる老人や子どもたちの心に生じた傷が癒えるには相当の時間が必要でしよ

う。私たちに何ができるかを考えるを得ません。

### ◆幻の「せかい子ども音読大会2011」

大震災のあった3月11日から二日後の3月13日(日)に、私たちは「せかい子ども音読大会2011」(以下、音読大会)という催事を東京・大崎で行う予定でしたが、震災のため、中止せざるを得ませんでした。

私はこの原稿の依頼を受けた時から、この催事の様子をお知らせしたいと思っていました。残念ながら、実施できませんでしたが、この音読大会で、私たちが何を考え、何をしようとしたのかを述べてみたいと思います。

この催事は、社団法人日本国際児童図書評議会(JBBY)と早稲田大学大学院日本語教育研究科および早稲田大学日本語教育研究センターの共催による、初めての試みでした。その目的は、端的に言えば、いろいろな背景の子ども

たちに本を読むことを体験してもらおうというものでした。催事のちらしには、目的が次のように説明されています。

「日本に来たばかりの子、外国のこばを勉強している子、外国のことばや文化を背景にもつ子、また、そうした子どもたちと仲良くなりたい子が、グループで日本語を声に出して読む体験を通して、相手なことばをつたえる楽しさ、他者と協力してひとつの目標を達成する喜びを知り、さらに読書への興味を抱くことを目的としています」

ここには、外国から来た子どもも日本の子どもも、みんなで本に親しみ、声と思いを重ねる経験から、自信をもって生きていってほしいというメッセージが込められています。

このイベントには、東京だけではなく、遠方からも参加希望の小中学生や中学生がすでに40名近くエントリーしていました。計画では、最初にアイスブレーキングをした後、グループに分かれて、いく

つかの作品を読んで、自分たちが音読する作品を決めます。グループで声を出して練習した後、みんなの前で発表するという流れです。作品は、主催者側で用意をしました。たとえば、谷川俊太郎作

「かえるのびよん」「朝のリレー」、阪田寛夫作「そうだ村の村長さん」、荘司武作「ぶぶんぶん」、工藤直子作「ともだち だいち さくのすけ」など。どの作品も声に出して読むのに適した内容やリズムをもった作品です。グループで読み方を工夫すると楽しく読める作品ばかりです。1グループ、6人ほどの小集団がこれらの作品からひとつを選び、みんなで音読練習をし、グループごとにステージの上で音読を披露します。6つのグループが発表を終えると、お互いによかったところを評価し合ったり、感想を述べ合ったりします。そして、主催者側から、参加した子どもたちに手作りのメダルと修了証を手渡し、子どもたちに本を読むことを奨励する予定でした。

詩人の谷川俊太郎さんも、趣旨に賛同してくださり、当日、来てくださることになっていました。この催事は、JBBYと私どもの大学院生が、昨年の秋から5か月以上かけて議論を重ね、準備をしました。さらに、ボランティアを募り、総勢約40名の大人たちが当日、子どもたちといっしょに活動する予定でした。しかし、すべてが震災で実施できなくなり、幻の第一回「音読大会」となりまして。機会があれば、ぜひ再度実施してみたいと思います。

### ◆「移動する子どもたち」とこぼの教育

私たちがこの「音読大会」を企画した背景には、子どもたちへの日本語教育の実践から生まれた思いがありました。それは、近年、日本でも増加している、他国の言語・文化を背景に持つ子どもたちに、日本語で本を読むことに触れさせたい、他の友だちと一緒に本を読むことの喜び、楽しさを感じてほしいという思いです。

文部科学省によると、外国から来たり、外国人の親のもと日本で生まれたなどの理由から、日本語の力が弱い、「日本語指導が必要」と思われる「外国人児童生



「せかい子ども音読大会2011」のちらし

「徒」が、いま全国に約3万人いると言われています(平成20年度)。私たちは、これらの子どもたちに学校で「取り出し指導」という形で日本語を教える実践をやってきました。そこでわかったのは、日本語を「聞く」「話す」という力より、日本語で「読む」「書く」という力を伸ばすには時間がかかるということでした。また子どもによっては、文字を読んだり、書いたりすることを負担に思い、敬遠する傾向があることもわかりました。

そこで、私たちはこれらの子どもたちだけではなく、日本の子どもたちもいろいろな背景のある子どもたちと一緒に「読むこと」を体験する機会を作りたいと考えました。それが、この「音読大会」という形になったのです。

実は、このように「幼少期より複数の言語に触れながら成長する子どもたち」が、今や世界中で増加しています。私はこれらの子どもを「移動する子ども」と呼んでいます。複数の言語や文化の間を日々「移動」しながら成長している子どもという意味です。グローバルゼーションにもない大量の人口移動が起こり、世界各地に「移動する大人たち」が増加しています。それらの大人たちの陰に、幼

少期より複数の言語に触れながら成長する「移動する子どもたち」が増えているのです。海外にある日本人学校や日本人補習学校などで学ぶ日本人や日系の子どもたちも、その中に含まれます。

世界各地を歩いてみて思うのは、「移動する子どもたち」として「ことばの教育」がいかに大切かということです。家庭内言語と学校で使用する学習言語が異なるということはよくあります。家でポルトガル語、学校で日本語を使用する日系ブラジル人の子どもたちも、その例です。これらの子どもたちにとっては、複数の言語の世界を日々移動しながら、学習を進めていくということは、必ずしも容易なことではありません。場



ある日本人補習授業校の窓辺  
体を育て、心を育てるものが子どもたちには必要

合によつては、どの言語によつてもコミュニケーションや教科学習が十分にできないケースもありました。したがって、「移動する子どもたち」の「ことばの教育」は、子どもの学力保障という意味でも、看過できない重要な課題なのです。

### ◆「移動する子どもたち」が本を読むとき

「移動する子どもたち」の「ことばの教育」で欠かせないのが、本を読む学習活動です。前述のように、「聞く」「話す」力は比較的早く習得できますが、「読む」「書く」力は習得に時間がかかります。そればかりか、「読む」「書く」力の習得は、「聞く」「話す」力の場合よりも、子どもの周りにいる支援者による足場かけ(スキヤフオーリング)がよりいっそう必要になります。たとえば、支援者が子どもと一緒に本を読むとか、本を読みながら、内容について話し合ったり、意味を確認したりすることが必要です。文の読み方や漢字の読み方も、声を出しながら教えてあげたいことです。

「移動する子どもたち」の「ことばの力」の伸長にとつては、とても重要な「学習活動」になります。また、学んだことばで、他者とやりとりすることは、子どもが他者とながることを実感する瞬間です。つまり、本を通じて、子どもが人間として他者とことばによつてつながる経験をすることという事です。そのことは、子どもの「人としての成長」にとつて、大切な体験となるはずで、さらに言えば、そのような子どもたちと一緒に本を読むことは、支援者にとつても、新しい人間理解の体験になると思います。

「移動する子どもたち」が読む本は、日本語でも母語でもよいと思います。周りの支援者とともに、子どもたちを豊かな本の世界へ誘うことができれば、それはきっと子どもたちの将来に役立つはずで、

◆本の世界が送る  
勇気と想像力

仙台にも、日本語の指導を受けている「移動する子どもたち」がたくさんいますが、今回の震災後、仙台を離れ、母国へ帰国したり、他県へ避難したりしたケースもあると聞きます。親の都合や自然災害で「移動せざるを得ない子どもたち」の心のサポートはどこへ逃れても必要な支援です。そのとき、本の世界が子どもたちの心を支えることも確かでしょう。自然の猛威に抗う人間の力は微力でも、絵本や童話など文学の秘めた力が、子どもたちに過酷な現実を乗り越える勇気と豊かな想像力を与えることを願わずにはいられません。